

これから未来にはばたく若者たちへ



若者の翼を折らない社会に

『**男**性は仕事、女性は家庭』『男性は主要な業務、女性は補助的業務』というような、男性・女性という性別によって固定的な役割を分ける考え方のことを性別役割分担意識といいます。周囲にいる大人たちの「女性は/男性はこうあるべきだ」「女性は/男性はこのようなことはするべきではない」という社会通念や風潮、イメージによって、自分の考えを否定されたり選択を制限されたり、そのせいで生きづらさや息苦しさを感じたことがある若者も少なくないのではないのでしょうか。

埼玉県が令和2年度(2020年度)に行った男女共同参画に関する意識・実態調査結果では、この性別役割分担意識に「同感しない」と答えた女性は65%、男性は60.3%で、男性は昭和63年度(1988年度)の調査開始以来、初めて6割を超えました。特に20歳代と比較すると、昭和63年度は「同感しない」と回答した女性は34%、男性は17%にすぎませんでしたが、令和2年度には、女性も男性も71%にまで増加しました。この結果から、32年間で若者の意識が大きく変化したことが読み取れます。

若者にとって生きやすい社会になっているとは言えないかもしれませんが、大人たちの意識も、社会も、少しずつ変わってきています。



自分たちの未来は自分たちが切り拓く、と積極的の声をあげ、行動している若者もいます。

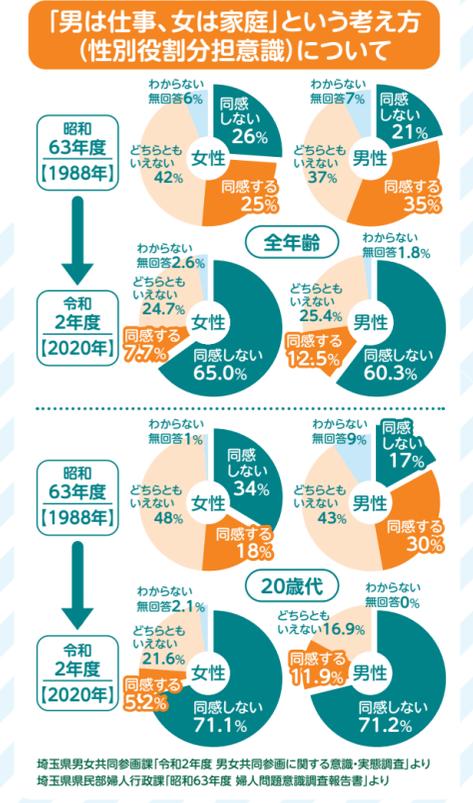
令和2(2020)年12月に閣議決定された「第5次男女共同参画基本計画」の策定にあたっては、若者たちの意見が多く寄せられました。SNS上で1000件近い若者の意見を提言としてまとめ、男女共同参画担当の大臣に直接届けたグループもありました。その結果、基本計画において、特に若者の意見が多く寄せられた「就活セクハラ防止」について内容が充実されるとともに、処方箋なしに緊急避妊薬を利用できるように検討することも新たに盛り込まれました。他にも、生理の貧困や性教育、選択的夫婦別姓、LGBTQなどをめぐる社会課題に向き合い、社会を変えるために行動する若者たちが注目されています。情熱を行動に移し、自分たちの未来を切り拓こうとする若者たちの声に、すべての世代の人たちが耳を傾けていくことが大切です。

With You さいたまでは、高校生や大学生など若い世代を対象に自分たちを取り巻く社会の現状と課題を男女共同参画の視点で学ぶ講座を開催してきました。これからも、あらゆる世代が多様な意見に触れる機会をつくり、誰もが自分らしく生きられる男女共同参画社会を推進していきます。

「さいたま輝き荻野吟子賞」

埼玉県では、本県出身で日本最初の公認女性医師となった「荻野吟子」にちなみ、その不屈の精神を今に伝える先駆的な活動を通して、男女共同参画の推進に顕著な功績のあった個人や団体、事業所に「さいたま輝き荻野吟子賞」を贈っています。

今回は第16回「さいたま輝き荻野吟子賞」受賞者の竹内舞子さん、山口絵理子さんのおふたりに話を伺いました。



若者の情熱を生かす道を拓く 竹内舞子 TAKEUCHI MAIKO (国連安保理北朝鮮制裁委員会専門家パネル委員)



たけうちまいこ
 東京大学法学部卒業後、平成13年に防衛庁(現防衛省)に入庁。常に女性初となるポストを歴任し、安全保障や外交の現場でキャリアを重ね、平成28年、日本人女性初かつ最年少で、国連安保理北朝鮮制裁委員会専門家パネル委員に選出される。制裁の履行状況に関する調査や諸外国政府との協議において主導的役割を果たし、国連による平和の取組に尽力している。(さいたま市出身)

- 朝起きてまずすること 家族「おはよう」を言い合う
- 好きな食べ物 …… 焼肉
- 好きな映画 …… 「硫黄島からの手紙」
- 好きな本 …… 金子みすゞ「私と小鳥と鈴と」
- リラックスタイム …… おいしい緑茶を淹れる
- 5年後の私 …… 学生、特に女性のキャリア形成を支援したい

自分が不利にならないセッティングを作る

大学を出る際に、それまで私がお世話になった社会に恩返しをしたいと考え、国にとって一番大事なことは国を守ることだと思い、防衛庁(現防衛省)に入りました。

今は国連の専門家パネル委員となり立場は変わりましたが、日本という国を守りたいという思いは今も変わっていません。この仕事は、国や企業の活動を調査し国連の制裁が履行されているかを監視し安保理に報告するのが主な任務です。また、制裁の内容や調査の重要性を各国政府に説明したり、調査対象となる人から直接聞き取りをしたりすることもあります。

日本だけでなく世界的にも、安全保障の分野は男性や軍人が多いです。私がパネルに入った時、一人だけ若い女性でアジア人——外見的には不利でした。

これまでの20年のキャリアの中でも、なぜこの人がここにいるのか、この人は助手なのかしら? そんな扱いを受けることは多々ありました。性別や年齢、人種などで、自分が弱い立場に置かれてしまう。でも私はいろいろなキャリアを積んでここまで来た。年齢が若くても、女であっても、この仕事をする能力や知識では決して負けていない、という自負がありました。

自分が不利にならないような「場」を自分でどう作るか。これは若い人たちにぜひ伝えたいことです。相手との関係により積極的になれるように場を作ることの重要性、これは経験の中で身につけたことだと思います。

私は特に背も小さい。だから、例えば背の高い年上の白人男性と一緒に並んでいると、初対面の相手が私には注目しない時もあるわけです。そういう時には自分で見せ場を作ります。一緒に行く相手と打ち合わせをして、ここは私が話しますと決めておくとか、さっさとスーツを着ていくとか、見上げたままにならないように相手を座らせて目線を合わせるとか、自分がどういうシチュエーションであれば、より積極的になれるかを考えながらやっています。

仕事では一回一回の面会が真剣勝負です。特に北朝鮮問題のように政治的にも難しい話題で、説得的な議論するには準備が必要です。場をいかに自分で作るかという工夫も必要だし、相手が納得するような知識を持ってそれを積極的に話すこと、自分の服装、話し方、いろんなことを考えながら、相手のことよく勉強して話をする、そして自分の主張を相手にわかってもらう。男性と同じことをする必要はないし、自分のキャラを変える必要もない。私は自分がどういう状況で強みを発揮できるかということを考えながら働くことで、苦しい思いを少しずつ変えていきました。

専門家パネルとは? 国際連合安全保障理事会15か国で北朝鮮の制裁について扱う北朝鮮制裁委員会の仕事を補佐するため、8名の委員で構成されたグループ。パネル委員は国をはじめ誰からの影響も受けず、独立の立場から北朝鮮に対する決議——国連が決めた約束事が守られているかを調査・報告している。

家族としての責任を果たすこと

国連も私が住んでいるアメリカという国も、自分の時間を使うことにとってもシビアです。特に専門職の人たちは、自分はプロとしてこれだけのことができる、というプライドを持ち、決められた時間の中でどれだけのパフォーマンスを出せるかを大事にしています。

仕事では効率性やパフォーマンスというところに重点を置き、家庭では家族の義務を果たす。それが男性も女性も人として当然だと考えられています。

きちんと休養をとること、家族としての責任を果たすこと、そして、働くこと。そのバランスがとれることも能力のうちと考えられている社会なので、果たすべき責任は仕事だけではありません。でも、男性だからこれをやらなきゃいけないとか、女性だからより家庭のことをしなきゃいけないといった考えは日本よりずっと少ないです。

世界にはまだまだたくさん自分の思いを生かせる場所がある

私はこれからも、引き続き軍縮や安全保障の分野で仕事をしていきたいと考えています。北朝鮮制裁という、北朝鮮という怖い国があって、そこにみんなでパッシュメント——罰を与えているような印象を持つ方もいらっしゃるかもしれませんが、でも、本当はそうではなく、これはあくまで、北朝鮮の核や弾道ミサイル開発のコストを上げ、北朝鮮を交渉のテーブルにつくよう促し、この問題を外交的に解決する努力を助けるための手段のひとつです。世界にこれ以上核兵器国を作らないというのは国連の願いでもあるし、世界の願いでもあるのです。

この仕事はどうしてもわかりにくいのですが、特に若い方に、こういう仕事があることを知ってもらいたいです。国連に限らず、世界のいろいろな所で、平和な世界を作りたいという情熱を持って活動している日本人の方はたくさんいます。そして、平和な世界を作るために働きたいという思いを持っている学生の方もたくさんいると思います。私はそういう人たちをサポートできたら、と思っています。こういう任務を担っている人間が国連にいる、ということをもっといろんな方に知ってもらいたいです。

今もいろいろな形で学生の支援をしています。自分がその活動を続けて、世界にはまだまだたくさん、自分の思いを生かせる場所がある、道はいろいろあるということを次の世代の人にもっと伝えていきたいです。それは単に機会があることを知るだけではなく、これから自分がどんな教育を受けてどんなスキルを磨いていかなければならないかにもかかわってきます。だから、何かをしたいという気持ち——情熱、パッションを持つこと、それをどう実際の仕事に繋げていくか、いろんな思いを国際的に生かすために、これから築っていく若い世代の、特に女性の方の手助けをするような仕事ができたらいいなと思っています。

どんな時でも今できることはゼロではない 山口絵理子 YAMAGUCHI ERIKO (株式会社マザーハウス代表兼チーフデザイナー)

やまぐちえりこ
 大学のインターン時代、途上国援助の矛盾を感じ、アジア最貧国と言われていたバングラデシュに渡る。必要なのは金銭の支援だけでなく、「現地にある素材や職人の技術を使ったモノづくり」だと感じ、平成18年に「途上国から世界に通用するブランドをつくる」を理念としたマザーハウスを設立。バングラデシュから始まった生産体制はインドやネパールなど60カ国に広がり、販売国も日本、台湾、香港、パリなど40店舗以上に展開している。(さいたま市出身)

- 朝起きてまずすること 散歩
- 好きな食べ物 …… 卵
- 好きな映画 …… 「ワンダー 君は太陽」
- リラックスタイム …… 絵を描く
- 尊敬する人 …… 両親
- 5年後の私 …… マザーハウスの絆がさらに強まっている世界にいる



可能性を信じる人間であり続ける

マザーハウス設立のきっかけは、大学時代にバングラデシュへ行き、安いモノが大量に生産される現場を見て、もっと付加価値を上げることができるのではないかと感じたことです。援助だけでは解決できないと思いましたし、モノづくりによって彼ら・彼女らは経済的自立を目指すはずだ、と思いました。私は可能性を信じる人間でありたいし、やればできるということ、強く確信しています。

バングラデシュでは女性が働くなんて、という考えが強くあり、私も安全面でリスクが大きいと思うことはありましたし、工場を歩いていると、なんで女が、という声も聞きました。

また、バングラデシュは自然災害やテロが多い国で、毎日が生きて死ぬかという瀬戸際でした。日本で大学生だった時は、試験に受かるか他の人より先に内定をとるとか、そういう小さな競争社会にいたので、その対比が激しくて、日本での自分の悩んでみて相当小さいなって、どうでもよくなりました。異文化の人と触れ合うと、自分の視野が狭かったことに気づかされますから、そういう経験を若いうちにしたいのかなと思います。

長期スパンの目標をたてる

モノづくりもですが、私はひとつのことを長く続けることが好きです。バングラデシュでは3年くらいで日系企業が帰ったりしますが、私が3年間で終わっていたら何もなかったと思っています。8年くらいでようやく人が育ってきて、10年くらいで不良品率が下がってきました。

現代社会において時間の感覚は非常に短くなってしまっていますが、10年くらいの単位で成果がでてくるものってたくさんあると思います。だから、急がずような意思決定をすることは避けたいし、ちゃんと吟味して、継続を目標にやっていきたいです。自分自身の大きな問題意識みたいなものってあまり変わらないんじゃないかとも思っていて、だったら同じ問題意識のもと、自分の人生10年を使ってこれをやろつみたいな、ぼんやりとでもいいから長期スパンの目標をたてる心が安定する気がします。短期目標ばかり掲げず、腰を据えて、10年間で何をやりたい? と考えることは、若い人にとっても大事なこともかもしれないと思います。

可能性を信じる人間であり続ける

世界11カ国とモノを通して本気で仕事ができるっていうのは素晴らしい多様性のかたまりですし、自分が25歳の時に描いた夢に乗って来て、一緒に夢を追いかけるかけがえのない仲間がいるというのは、一番大きなラッキーだと思っています。もちろんプレッシャーもありますが、ひとりなら乗り越えられないことも、チームみんなが家族のように支え合って乗り越えていける。私たちは単に物販をしているのではなく、お客様と一緒にコミュニティーを作っているという感覚でビジネスをしているので、国を越えての絆やアジアの職人みんなのがんばりがお客様の笑顔につながるがみいたいな、そういう笑顔の循環体系が資本主義の中でできたら素敵だなと思っています。

若者たちに伝えたいこと

私自身、埼玉の工業高校にいた頃、自分が世界を相手に仕事をするって全然イメージできていなかったです。慶応大学に行くのも、工業高校からどうやって? 入れるわけがないと言われたけれど、実際に自分がこういう道を行ってみると、大人の言うことだけが正解じゃないと思うんです。道はたくさんあるし、自分で自分ではできないっていう線引きをしたりするのはよくないと思っています。

私は現場で培ったものが自分の血となり肉となっているので、できないと決める前にまずは体験してみても自分に合うかどうか考えてみるとか、動きながらいいと思っています。日本人は完璧な答えを常に求めるような気質があると思うのですが、私は実際にやってみて軌道修正して、やっぱりこうしようっていう感じで、ピボットするように歩いてきたと思っています。頭でっかちにならずに行動して考えていくっていうスタイルがいいと思います。

バングラデシュで非常事態宣言になった時に、会社潰れちゃうかもっていう危機というか絶望感がありましたけど、でもその時に、じゃ今できることって本当にゼロかなということは何度も考えました。どんな時でも今できることはゼロではないって言葉を、若い人たちに贈りたいなって思います。